

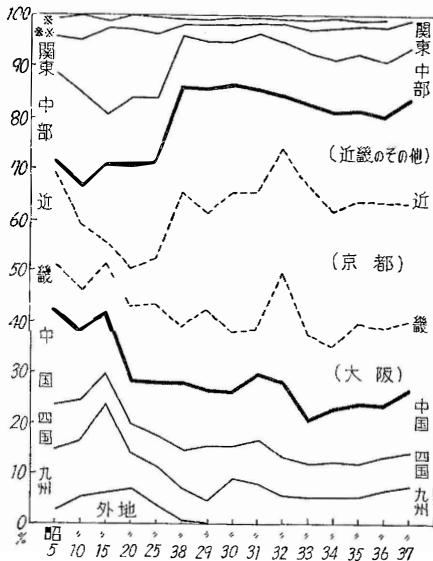
「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

片岡仁志^{a)}
 佐藤幸治^{b)}
 石井完一郎^{c)}

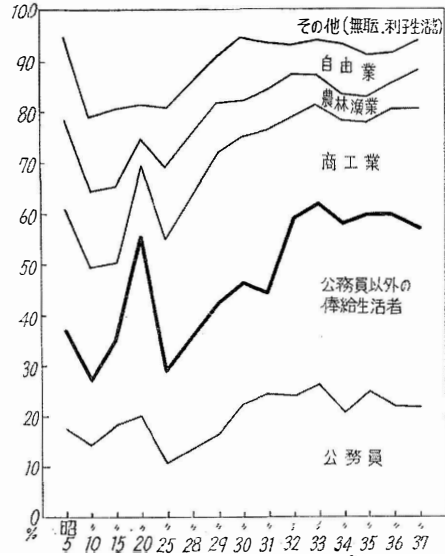
1. 問題

総合研究「高等教育に対する社会的要請」における第2班課題「大学生の社会的地位と生活の実態調査」をめぐって第1年次調査で明らかにされた問題は、学生の社会的地位変動に関連する基本条件として、周知の通り戦後に大学増設に伴って学生数が著しく増加したことの外に、戦前

第1図 学生の出身地域 (比例配分)



第2図 学生の出身家庭職種 (比例配分)



(備考)

- 1, 調査対象は昭5~25, 京都大学1年. 昭28以降, 全学学部学生. 但し昭37は教養課程男子. すべて外国人学生のぞく.
- 2, 調査方法は層化無作為標本法, 標本抽出率は昭5~25, 1/12, 昭28, 29, 1/15, 昭30, 31, 1/12, 昭32, 男1/12, 女1/5, 昭33以降, 男1/12, 女1.
- 3, 出身地域区分は, 昭5~25, 旧制中学, 昭28以降, 新制高校を基準とする.
- 4, 昭28, 以降の調査は京都大学学生部編, 学生生活実態調査報告にもとづく.
- 5, ※は北海道, ※※は東北, 昭37では, 北海道, 東北を含む.

(備考)

- 1, 調査対象, 調査方法は前に同じ.
- 2, 昭28, は調査資料を欠く.
- 3, 昭37, は全学男子.

から戦後にかけて学生の出身地域, 出身階層に重要な変動が起っていることである. 即ち, 第1図・第2図に示めすように, 例えば京都大学においては, 学生の出身地域は戦前約30%を占める近畿地方が戦時中(昭15.~20.)

* a) 京都大学教授 b) 京都大学教授 c) 京都大学助教授

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

に約10%増え、戦後、新制大学発足（昭24.以降、新制1年生入学）以後、更に約10%以上増えて全学の半ばを超えたまま今日に及んでおり、また、学生の出身家庭職種においては、概ね中産階級と目される俸給生活者（公務員を含む）が戦前約30%から戦時中と戦後間もなくに全学の50%を超えていること等が注目される。

こうした傾向について考えるに、まず、戦前戦後を通じて近畿隣接の中部・中国地方の変化が少いにも拘らず、戦後に近畿出身者が全学の過半数を占めるにいたっていることは、嘗て旧制高校を媒ちとして学生の出身地域が比較的偏りの少なかった旧帝大時代に比べて、今や京都大学が「近畿」という community を基盤とする所謂 community college への道をたどっていることを意味し、それは学生出身地域の local 化による社会経験の狭小化が将来の指導者層の視野に影響しかねない反面、学生の生活経験と実社会との接近による学生の社会意識の強化にも影響すると予想される。また、戦後に中産階級出身者が学生階層の半ばを占めていることは、戦後における俸給生活者の増加という国民全体の就業動態の反映とみられるが、なお、裕福な階級の出身者が比較的多かった旧帝大時代に比べて一般学生の経済生活水準が低下していることを意味し、それは学生アルバイトの一般化、社会意識の助長、階層移動の手段としての就職問題の重視等に影響するものと思われる。これらの基本条件変動に伴う影響のもとに、嘗て全国の裕福な家庭から「笈を負うて都に遊学した」少数者である学生について、「苦学」したとしても、志を達した「学士様なら娘をやろか」とまで言われたような学生の高い社会的地位とそれに支えられた所謂エリート意識は著しく低下し、今や「社会人」・「市民」の自覚に立つ新しい地位・役割意識が発展しつつあるものと考えられる。

しかし、前述の出身地域・出身家庭職種の基本条件は図示した通り戦後数年来、ほぼ恒常状態に達しているが、戦前戦後を通じての両者条件の変動の間には非常に有意な関係（スピアマン順位相関 $r_s=0.666$, $P<.01$ ）もみられるので、今後、国民就業分野の変動とともに学生出身階層の中産階級化が一層、進行する場合においては、学生出身地域の地許社会集中化も一層、促進されるものと推定され、また、同様の基本条件変動が東京大学・大阪大学・同志社大学・早稲田大学等の旧制以来の大学にもみられるので、これは最初から locality をもって発展した地方新制大学若干を除いて多くの旧制以来の大学に一般化している現象でないかと考えられる。

ここに、現在、「学生である」という地位とそれに基づく役割とを学生自身がどのように意識して生活しているかの問題は、今日、彼らを大学に送り出している社会が戦前から大きく変動しつつ大学に何を求めているかにアプローチする契機ともなり、しかも、今後の社会経済的条件の動向とともに注目さるべき、且、特に旧制以来の大学について検討さるべき課題であると思われる。

2. 調査計画

1) 東京大学学生部編；戦後における東大生の経済生活、昭35, p. 23, p. 44, 及び各大学学生部編；学生生活実態生活調査報告

以上の問題意識に基づいて第2年次本調査で探索しようとした課題は、学生としての地位・役割を特に意識せざるをえない数々の主要生活領域——学業生活・学生自治活動・課外活動・アルバイト生活等——について学生の生活意識を明らかにし、その中で彼らの地位・役割観の変化の動態をみることであり、調査対象としては、近畿地方における旧制以来の大学として旧帝大の国立総合大学(甲)、私立総合大学(乙)、新制以来の大学として学芸大学(丙)、公立大学(丁)を選び、また、生活意識の成熟度の相違を考慮して各大学の教養・専門課程等の留年者と大学院・外国人学生等を除く全学年本科学学生だけとした。さらに調査方法としては、各大学の文理系列差、性差等を考慮して層化無作為標本法(標本抽出率は甲が男子1/12、女子1/2、他の大学が男女ともに1/12)とし、多肢選択法・無記名による調査質問紙の郵送によった。調査時期は学生としての生活意識が安定してくる夏休み後、学業への意識が高まる前期試験前に設定し、予備調査の後、質問紙を昭和38年9月15日に発送して同25日〆切で回収した。調査の対象・回収状況は第1表に示めす通りである。

3. 調査結果の概要

調査質問項目は大学・学部・入学年度・性別・出身府県名の外に5分類計25問にわたっており、

第1表 調査対象・回収状況

調査対象		発送数	回収数	回収率
甲 (国立総合大学)	文科系	332	222	69%
	理科系	478	349	73%
	計	800	571	71%
乙 (私立総合大学)	文科系(昼間)	479	262	55%
	理科系(夜間)	163	82	50%
	計	642	344	54%
丙(国立学芸大学)		113	71	63%
丁 (公立大学)	文科系	39	30	77%
	理科系	36	23	64%
	計	75	53	71%
総計		1630	1039	63.7%

(備考) 調査母数の総計 17752。内訳は省略する。回収数は次を除く有効標本数である。
住所不明にて返送37、白紙5、大学学部等無記入18、冗談半分の記入1、破ったままの返送1、調査無意味として半分返送、1—計63。

調査結果は各質問ごとに男女別・文理別・大学別・学年別・出身地域別の一次集計、及び主要設問間の二次集計を行うとともに、5点尺度(例えば、全く賛成5点、やや賛成4点、何ともいえない3点、やや反対2点、全く反対1点)の評定平均値(M)・標準偏差値(SD)の計算、ケンダル順位相関係数(r)・ χ^2 値による有意性検定等を行ったが、これらの結果の全体の報告は紙数に限りがあるので、以下、出身地域別を除く一次集計の中、有意性の認められた結果に限り、設問分類に従って簡潔に所見を記載するにとどめたい。なお、各質問は原文に近い形で要約するとともに、各選択肢は本文、または図表内に附し、図表内の数値は例数に対する選択肢反応数の%、 $r \cdot \chi^2$ 値に

- 予備調査は、同上質問紙を7月12日、京大各学部各学年計100名に発送し、7月20日〆切で計67名を回収し、生活意識を特色づけないと考えられた4問を除き、各問の選択肢を若干、修正した。
- 丙(学芸大)は文理別区分が困難であるので、文理別集計では除かれている。
- 文理別、学年別の標本数の偏りは少ないが、標本数が多い甲・乙および男子の傾向が文理別等の比較に反映しやすいので、それを前提として所見をのべることにする。
- %は小数第1位4捨5入、 $r \cdot \chi^2$ 値は第4位切捨、M・SDは第3位4捨5入とした。

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

おける**は「非常に有意」($P < .01$), *は「有意」($P < .05$), *のないものは「有意といえない」($P > .05$)⁶⁾ 関係を示めし、註における値は省略して*等を附するにとどめる。

(A) 大学について

(1) 「学生の本分」というものをどの様に考えるか (1項選択)

第2表 A(1)学生の本分について・男女別

選択肢(1項選択)	男	女	計
1. 考えたことがない	4%	3%	4%
2. 専心の勉学	15	11	14
3. 勉学と教養	58	71	62
4. 良い職業人への素地をつくる	7	3	6
5. 国家の指導者への素地をつくる	1	0	1
6. 民族の指導者への素地をつくる	6	5	6
7. よくわからない	2	2	2
8. その他	6	4	5
9. 無記入	1	2	1
例数 (100%)	770	269	1039

3, 勉学と教養, 男<女, $\chi^2 = 14.396^{**}$

第3表 A(1)同上・文理別

		勉学と教養	その他	例数(100%)
文	男	57%	43%	338
	女	74	26	176
	計	63	37	514
理	男	60	40	400
	女	54	46	54
	計	59	41	454

文(男)<文(女), $\chi^2 = 15.399^{**}$

理(男)-理(女), $\chi^2 = 0.659$

文(男)-理(男), $\chi^2 = 0.547$

文(女)>理(女), $\chi^2 = 8.385^{**}$

文(計)-理(計), $\chi^2 = 1.644$

差は男子に顕著であり、また、甲でのみ女子が男子より多い性差が認められる。要約すれば甲の男子学生に「勉学と教養」が少いとみられる。なお、甲・乙・丁ともに「勉学と教養」について文理差はない。

3, 学年別比較 「勉学と教養」は全般的には学年差がないが、女子で1・3年に多くなる

6) %による比較の場合、或は χ^2 値が、 $.10 > P > .05$ ($2.706 < \chi^2 < 3.841$)の範囲にある時に×を附し、いずれも「……の傾向がある」という表現を用いている。また、図表と註において、例えば男<女は有意差がある時に、男一女は有意差がない時に用いている。

7) 甲, 3, 「勉学と教養」, 男(54%) < 女(67%)*

第4表 A(1)同上・大学別

同上	甲	乙	丙	丁
1. 考えたことがない	4%	3%	3%	4%
2. 専心の勉学	16	12	13	11
3. 勉学と教養	56	68	72	70
4. 良い職業人への素地をつくる	6	7	1	4
5. 国家の指導者への素地をつくる	2	0	0	0
6. 民族の指導者への素地をつくる	5	6	7	8
7. よくわからない	2	2	0	0
8. その他	7	3	4	2
9. 無記入	1	1	0	2
例数 (100%)	571	344	71	53

3, 甲<乙, $\chi^2 = 12.270^{**}$

甲<丙, $\chi^2 = 6.453^*$

甲-丁, $\chi^2 = 3.755 \times$

1. 男女別・文理別比較 全般的には「勉学と教養」が半ば以上を占め、それは特に女子の方に多く(第2表)、その他の考え方では性差がない。また、その性差は文科系のみ認められ、その文理差は女子のみに認められて、女子文科系が女子理科系より多い(第3表)。

2. 大学別比較 「勉学と教養」が甲に比べて乙・丙に多く認められるとともに、丁にも多い傾向があるが(第4表)、こうした大学⁷⁾

第5表 A(1)同上・学年別

		勉学と教養	その他	例数(100%)
1 年	男	58%	42%	231
	女	76	24	86
	計	63	37	317
2 "	男	57	43	163
	女	67	33	75
	計	60	40	238
3 "	男	59	41	201
	女	75	25	61
	計	63	37	262
4 "	男	58	42	175
	女	66	34	47
	計	60	40	222

1年(男)<1年(女), $x^2=7.905**$
 2年(男)-2年(女), $x^2=1.978$
 3年(男)<3年(女), $x^2=5.272*$
 4年(男)-4年(女), $x^2=0.907$

を尊重した旧帝大の伝統からの根強い影響が感じられる。

(2) あなたの大学生生活を良くするには? (2項選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的には「教官との結びつき緊密化」が半ば近くを占め、

第6表 A(2)大学生生活を良くするには・男女別

選択肢(2項選択)	男	女	計
1. 教養コース充実	18%	19%	18%
2. 専門コース充実	20	30	22
3. 専門期間延長	21	9	18
4. 実用教育の重視	8	10	9
5. 授業方法の改善	32	34	33
6. 学部間の交流	8	7	8
7. 大学自治強化	2	3	3
8. 学生自治強化	3	5	4
9. 教官との結びつき	46	48	47
10. 相談の徹底	5	7	5
11. 奨学金拡充	9	6	8
12. 厚生施設拡充	12	7	11
13. その他	4	3	4
14. 無記入	10	16	11
例数 (100%)	770	269	1039

$r=0.717**$

第7表 A(2)同上・大学別

同上	甲	乙	丙	丁
1. 教養コース充実	(3)24%	11%	17%	8%
2. 専門コース充実	14	(3)25	(1)54	(1)45
3. 専門期間延長	22	12	10	21
4. 実用教育の重視	4	16	11	9
5. 授業方法の改善	(2)27	(2)44	(3)28	(2)32
6. 学部間の交流	11	6	0	2
7. 大学自治強化	3	1	1	9
8. 学生自治強化	3	3	9	6
9. 教官との結びつき	(1)47	(1)52	(2)37	(3)26
10. 相談の徹底	4	7	6	8
11. 奨学金拡充	11	4	7	6
12. 厚生施設拡充	15	5	3	15
13. その他	4	3	4	2
14. 無記入	11	11	14	11
例数 (100%)	571	344	71	53

()内は上から3位までの順位

8) 女子, 2+3, 1年(90%) 2年(81//) 3年(79//) 4年(77//), 1年>4年**

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

「授業方法の改善（スタッフ増員を含む）」がこれに次ぐが、これらは今日の所謂マス・プロ的大学の欠陥を重視するものと解され、以下、多少の差はあるが、問題視される順位には性差もなく（第6表）、文理差もない。ただ、⁹⁾「専門コース充実」が女子に、「専門期間延長」が男子に多く（第6表）、マス・プロ的問題が文科系に、「教養コース充実」が理科系に、「専門コース充実」が文科系に多い傾向が注目される。⁹⁾

2. 大学別比較 マス・プロの問題が丙・丁より甲・乙に多いことは夫々の学生数の大小から当然であるが、「専門コース充実」が丙・丁に多いことは大学側に教授陣の充実が必要であることと学生側に職業人への役割意識が強いことを示唆していよう（第7表）。

3. 学年別比較 マス・プロの問題は4年間を通じて重視され、就中、「教官との結びつき緊密化」が4年で少々低下していること、学年が進むほど、「授業方法の改善」が増し、次に「専門コース充実」・「専門期間延長」も増していること等が注目される（第8表）。

4. 所見 以上の男女別・文理別・学年別比較におけるマス・プロ的問題の重視は標本数の関係から甲・乙の傾向を反映しているとみられるが、この問題が大規模の甲・乙大学で、「専門コース充実」が新制以来の大学丙・丁で特に重視されていることは、「勉学と教養」をめざしている学生一般の期待に対して今日の大学が充分に応えていない諸点を示唆していよう。

(3) あなたの大学生活に感じる誇り、ひけめの程度は？（5点尺度・1項選択）

1. 男女別・文理別比較 全般的結果は58%が誇り、10%がひけめを有し、評定平均値は「やや誇り」の方によっているが、誇りの有無に性差は認められず（第9表）、また、文理差も、文科系での性差もないのに対して、理科系で女子が男子より誇りをもっている。¹⁰⁾

第8表 A(2)同上・学年別

同 上	1年	2年	3年	4年
1. 教養コース充実	(3)22%	19%	14%	17%
2. 専門コース充実	18	(3)20	(3)24	28
3. 専門期間延長	10	13	(3)24	(3)29
4. 実用教育の重視	10	8	8	9
5. 授業方法の改善	(2)28	(2)32	(2)34	(1)38
6. 学部間の交流	8	11	7	7
7. 大学自治強化	1	6	2	2
8. 学生自治強化	4	8	2	2
9. 教官との結びつき	(1)52	(1)45	(1)50	(2)37
10. 相談の徹底	8	5	4	4
11. 奨学金拡充	7	8	9	9
12. 厚生施設拡充	13	11	11	8
13. その他	4	3	2	5
14. 無記入	14	13	11	5
例数 (100%)	317	238	262	222

() 内は上から3位までの順位

第9表 A(3)大学生活への誇り、ひけめの程度・男女別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
男	13	44	35	7	1%	768	3.60	0.84
女	8	51	24	14	3	268	3.49	0.92
計	12	46	32	9	1	1036	3.57	0.86

評定値、5(非常に誇り)、1(非常にひけめ)、 $5+4(\text{男})-5+4(\text{女})$ 、 $\chi^2=0.638$

9) 5, 文(36%)理(30%), 9, 文(51%)理(44%), 1, 文(15%)理(22%), 2, 文(23%)理(17%), 文理の間 $r=0.794$ * *

10) M, 文科系, 男(3.67)女(3.58)計(3.64), 理科系, 男(3.60)女(3.72)計(3.61), 理科系, 5+4, 男(56%)<女(74%) *

2. 大学別比較 誇りの有無にいて甲は乙より誇りが多い傾向にあり, 甲は丙・丁より誇り

第10表 A(3)同上・大学別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
甲	12	51	31	6	0%	569	3.69	0.77
乙	12	45	31	10	1	344	3.58	0.85
丙	4	18	44	24	9	70	2.86	0.95
丁	9	32	36	19	4	53	3.25	0.97

5+4 (甲)−5+4 (乙), $x^2=3.129 \times$
 5+4 (甲)>5+4 (丙), $x^2=42.493 * *$
 5+4 (甲)>5+4 (丁), $x^2=9.861 * *$

第11表 A(3)同上・学年別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
1年	13	50	29	8	1%	317	3.65	0.85
2年	11	43	36	8	2	236	3.53	0.86
3年	11	47	28	13	1	262	3.53	0.89
4年	11	43	37	7	1	221	3.57	0.83

5+4 (1年)>5+4 (2年), $x^2=4.174 *$
 5+4 (1年)−5+4 (3年), $x^2=1.395$
 5+4 (1年)−5+4 (4年), $x^2=3.206 \times$

をもつとともに, 評定平均値では甲の「誇り」が最も高く, 乙・丁がこれに次いでいるのに対し, 丙は少々「ひけめ」をもち, 偏差値では丙・丁の方が優劣感のひらきが大きい(第10表)。なお, 各大学ごとの性差はなく, 各大学ごとの文理差は乙のみで認められて, 文科系が理科系より誇りをもっている。

3. 学年別比較 誇りの有無と程度を総合

すると, 全般的には1年に比して2年で誇りが低下したまま3・4年に及んでいるが(第11表), 性差は1年で認められず, 2年で男子の誇りが低下して女子より少く, 3・4年で男女逆転して男子の誇りが回復され, 女子の誇りが低下して優劣感のひらきが大きくなっている(第12表)。ここに3・4年の専門コースにお

ける勉学に対する男女間の態度の相違, さらに役割意識の相違のあることが想定される。

第12表 A(3)同上・M, SD 学年男女別

		M		SD	
		男	女	男	女
1	年	3.65	3.65	0.85	0.83
2	年	3.47	3.55	0.88	0.79
3	年	3.62	3.25	0.82	1.03
4	年	3.63	3.34	0.76	1.02

誇り, 1年(男)−1年(女), $x^2=2.687$
 2年(男)<2年(女), $x^2=4.080 *$
 3年(男)−3年(女), $x^2=2.326$
 4年(男)−4年(女), $x^2=0.814$
 誇り, 1年(女)>4年(女), $x^2=5.621 *$

よって左右され, どのような役割意識の内容をもっているかが問題となろう。

(4) あなたの大学生生活のどのような点に誇り, ひけめを感じるか(1項選択)。

1. 男女別・文理別比較 全般的には「伝統・学風」が最多であり, 各項を選ぶ順位には性差及び文理差がないが, 男子が「先輩の業

4. 所見 旧制以来の大学甲・乙で誇りが大きいのは当然と考えられるが, それが何に

第13表 A(4)大学生生活に誇りを感じる点・男女別

選択肢(1項選択)	男	女	計
1. 入学率	0%	0%	0%
2. 伝統, 学風	24	26	24
3. 学生の素質	4	6	4
4. 教育的レベル	1	1	1
5. 学問的レベル	8	10	9
6. 学生自治レベル	1	2	1
7. 学園の規模施設	2	1	1
8. 国公私立の別	1	1	1
9. 先輩の業績, 評価	8	2	6
10. 就職率	2	0	1
11. 何となく全体に	5	9	6
12. その他	1	2	2
13. 無記入	0	0	0
例数(100%)	770	269	1039

$r=0.624 * *$

11) 甲, 5+4, 文(67%)−理(61%), 乙, 5+4, 文(61%)>理(46%)*, 丁, 5+4, 文(33%)−理(52%)

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

第14表 A(4)同上・文理別

同 上	文	理
1. 入学率	0%	0%
2. 伝統, 学風	32	19
3. 学生の素質	4	4
4. 教育的レベル	1	1
5. 学問的レベル	6	12
6. 学生自治レベル	1	1
7. 学園の規模施設	0	3
8. 国公立の別	1	0
9. 先輩の業績, 評価	7	7
10. 就職率	2	0
11. 何となく全体に	7	7
12. その他	1	2
13. 無記入	0	0
例数 (100%)	514	454

$r=0.562*$

績・社会的評価」を、女子が「何となく全体に」を選ぶところに若干の相違がみられ、また、文科系が「伝統・学風」を、理科系が「学問的レベル」を多く選ぶところに若干の相違がみられる(第13表・第14表)。

2. 大学別比較 優劣差に換算しなおした%からみると、甲では「伝統・学風」、「学問的レベル」、「先輩の業績・社会的評価」に、乙では「伝統・学風」に誇りがもたれ、逆にひけめが丙における「学問的レベル」、「伝統・学風」に、丁における「伝統・学風」、「学園の規模施設」に示めされ、なお、丁で「学生の素質」に誇りがもたれている(第15表)。

3. 学年別比較 顕著な学生差はみられないので結果は省略する。

4. 所見 旧制以来の大学甲・乙で「伝統・学風」が学生の誇りに最も影響し、逆に新しい大学丙・丁でそれを欠くことが相当なひけめになっていることを考えあわせると、その有無が学生の誇りを左右する最大の要件になることは明らかであるといわねばならず、今日もなお学生一般に伝統への強い郷愁が残されていることが注目される。

(B) 学業について

(1) どのような気持で授業に出るか(1項

第15表 A(4)大学生生活に誇り、ひけめを感じる点・大学別

同 上	甲	乙	丙	丁
1. 入学率	0%	0%	0%	0%
2. 伝統, 学風	23	35	-4	-6
3. 学生の素質	3	2	-1	15
4. 教育的レベル	0	1	0	2
5. 学問的レベル	13	1	-6	-2
6. 学生自治レベル	1	1	1	0
7. 学園の規模施設	1	2	-3	-4
8. 国公立の別	0	-1	1	4
9. 先輩の業績, 評価	10	2	-1	0
10. 就職率	0	2	-1	0
11. 何となく全体に	6	4	3	8
12. その他	0	-1	1	2
13. 無記入	-1	0	0	0
例数 (100%)	571	344	71	53

%は、誇りの反応数から、ひけめの反応数を減じたもの、従って、正の%は誇り>ひけめ、負の%は誇り<ひけめの場合を示す。

第16表 B(1)授業に出る時の気持・男女別

選 択 肢 (1項選択)	男	女	計
1. 習慣的で何も感じない	17%	18%	17%
2. 義務だから当然と思って	10	13	11
3. 知識, 技能を吸収したい	32	29	31
4. 真理探究の悦びにかられて	4	5	4
5. 資格をえたり職業に役立てたい	5	5	5
6. 教官の人間性にふれて自分をねりたい	8	13	9
7. 学友に接して刺戟をうけたい	7	7	7
8. 単位をとって卒業したい	9	6	8
9. 気がまぎれる	1	1	1
10. その他	5	3	5
11. 無記入	1	0	1
例数 (100%)	770	269	1039

6, 男<女, $\chi^2=7.850**$, 3, 男一女, $\chi^2=0.880$

第17表 B(1)同上・文理別

		知識、技能を吸収したい	教官の人間性にふれたい	その他	例数(100%)
文	男	28%	13%	59%	338
	女	27	15	58	176
	計	27	13	60	514
理	男	36	4	60	400
	女	39	7	54	54
	計	36	4	60	454

知識、技能を吸収したい

文(男)<理(男), $\chi^2=5.382^*$

文(女)一理(女), $\chi^2=2.945 \times$

文(計)<理(計), $\chi^2=8.418^{**}$

教官の人間性にふれたい

文(男)>理(男), $\chi^2=21.851^{**}$

文(女)一理(女), $\chi^2=1.976$

文(計)>理(計), $\chi^2=26.365^{**}$

第18表 B(1)同上・大学別

選択肢(1項選択)		甲	乙	丙	丁
A	{ 習慣的で何も感じない・義務だから当然・気がまぎれる	32%	27%	28%	34%
B	{ 知識、技能を吸収したい	34	26	16	40
C	{ 教官の人間性にふれたい	5	16	16	8
D	{ 資格をえたい・単位をとり たい	11	15	13	8
E	{ その他	18	16	27	10
例数(100%)		571	344	71	53

第19表 B(1)同上・大学男女別

同上		甲	乙	丙	丁
A	{ 男	31%	25%	34%	34%
	{ 女	(34)	(31)	(23)	(33)
B	{ 男	33	26	3	59
	{ 女	(35)	(27)	(26)	(17)
C	{ 男	5	14	16	0
	{ 女	(6)	(21)	(15)	(17)
D	{ 男	12	17	3	0
	{ 女	(8)	(9)	(21)	(17)
E	{ 男	19	18	44	7
	{ 女	(17)	(12)	(15)	(16)
例数(100%)		462	247	32	29
		(109)	(97)	(39)	(24)

「教官の人間性にふれたい」が甲・乙の文科系

選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的には「習慣的で何も感じない」・「義務だから当然」・「気がまぎれる」(計約30%)を除けば、約70%が何らかの目的意識をもって授業に出ているわけであるが、「教官の人間性にふれて自分をねりたい」気持が女子の方に多い以外は性差はない(第16表)。また「知識・技能を吸収したい」が理科系に多く、「教官の人間性にふれたい」が文科系に多いが、こうした文理差は男子で顕著であるとともに女子でもそうした傾向がある(第17表)。

2. 大学別比較 %でみると、「知識・技能を吸収したい」が甲・丁で、「教官の人間性にふれたい」、「資格をえたい」・「単位をとりたい」が乙・丙で多い傾向にあって、総合すると、こうした目的意識は乙・丙に多い傾向にあるが(第18表)、さらに大学ごとの性差については甲・乙で認められず、「知識・技能を吸収したい」が丙の女子、丁の男子に多く、「教官の人間性にふれたい」が丁の女子、「資格・単位をとりたい」が丙・丁の女子に多い傾向がみられる(第19表)¹²⁾。なお、大学ごとの文理差は「知識・技能を吸収したい」が乙の理科系で多く、

第20表 B(1)同上・学年別

同上	1年	2年	3年	4年
A	33%	31%	29%	23%
B	29	35	32	32
C	8	10	8	11
D	12	12	13	15
E	18	12	18	19
例数(100%)	317	238	262	222

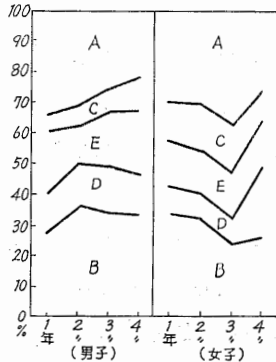
12) B項, 丙, 男<女*, 丁, 男>女**, C項, 丁, 男一女x, D項はC項の傾向と同じ。

13) が多い。

3. 学年別比較 %でみると、学年とともにA項（「習慣的で何も感じない」・「義務だから当然」・「気がまぎれる」）が漸減して授業への目的意識が漸増し、D項（「資格をえたい」・「単位をとりたい」）が漸増する傾向があるが（第20表）、さらに学年ごとの性差をみると、B項（「知識・技能を吸収したい」）に性差がなくて、C項（「教官の人間性にふれたい」）で1年から3年にかけて女子が多い傾向があり、D項で

男子が多いのに、4年にいたって女子が多くなり、1年から4年にかけて男子でA項が漸減している（第21表・第3図）。

第3図B(1)同上・学年男女別 (比例配分)



第21表 B(1)同上・学年男女別

同 上		1年	2年	3年	4年
A	男	34%	31%	26%	22%
	女	(30)	(31)	(38)	(26)
B	男	27	36	34	33
	女	(33)	(32)	(23)	(26)
C	男	6	7	7	11
	女	(13)	(15)	(15)	(11)
D	男	13	14	15	13
	女	(9)	(8)	(8)	(23)
E	男	20	12	18	21
	女	(15)	(14)	(16)	(14)
例 数 (100%)	男	231	163	201	175
	女	(86)	(75)	(61)	(47)

4. 所見

以上を甲に比して要約すると、乙は知識・技能

への意欲よりも「教官の人間性にふれたい」気持と資格・単位への現実的欲求が強く、丙は、そうした特徴に近いが、男子に資格・単位への意欲が少くて女子に資格・単位及び知識・技能への意欲が多いとみられ、丁は、男子に知識・技能が、女子に資格・単位が強く欲せられているところに夫々の大学における学生の役割意識の特徴がみられよう。

(2) 現代の学生が単位さえとればよいとする考え方はよくないとする一般意見をどう思うか (5点尺度・1項選択)

第22表 B(2)単位主義を不可とする意見に対して・男女別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
男	30	19	25	13	13%	769	3.40	1.36
女	31	23	19	18	9	269	3.50	1.32
計	30	20	24	15	12	1038	3.43	1.36

評定値, 5(全く賛成), 1(全く反対)
5+4(男)-5+4(女), $x^2=1.897$

第23表 B(2)同上・大学別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
甲	33	21	23	12	11%	570	3.54	1.35
乙	25	18	26	19	12	344	3.27	1.33
丙	28	25	20	14	13	71	3.42	1.36
丁	30	15	21	21	13	53	3.28	1.42

5+4(甲)>5+4(乙), $x^2=9.974$ **
5+4(甲)-5+4(丙), $x^2=0.019$
5+4(甲)-5+4(丁), $x^2=1.615$

1. 男女別・文理別比較 全般的には一般意見の支持が50%で、反対が27%であり、評定平均値は「やや賛成」の方によっているが、賛成することについては性差はなく（第22表）、理科

13) B項, 乙, 文(23%)<理(35%)*, C項, 甲, 文(9年)>理(3年)***, 乙, 文(18年)>理(9年)*

14) C項, 1年, 男<女*, 2年, 男-女x, 3年, 男<女*, 4年, 男-女, D項, 3年(女)<4年(女)*

15) 「気がまぎれる」は%が少ないので、これを除いて検定した。1年(男)>4年(男)**

系で女子に賛成が多い文理差だけが認められる。¹⁶⁾

2. 大学別比較 評定平均値では甲・丙で賛成度が高く、甲が乙より賛成者が多い(第23表)。また、大学ごとには甲で女子の方に賛成者が多い以外に性差がなく、さらに文理差もない。¹⁷⁾

3. 学年別比較 賛成度は学年とともに漸減の傾向にあるが、1年・4年間には差を認めるまでにいたっていない。¹⁸⁾ また、学年ごとの性差もない。

4. 所見 甲で賛成度が著しく高いことは、旧帝大の学問的伝統の影響によって現在の単位主義的傾向にそれだけ批判的であることを意味すると考えられ、また、乙・丁で賛成度が特に低いことは、授業に臨む気持において乙で資格・単位への現実的欲求が強く、丁で目的意識が少いことと関連するのではと推定される。この点は二次集計で確かめるべき問題である。

(3) 現代の学生が集団討議や実践のみを好み、個人的思索を嫌らうのはよくないとする一般意見をどう思うか(5点尺度・1項選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的には一般意見の支持は52%で、反対は22%で、評定平均値は一般意見支持に傾いており、性差もなく(第24表)、文理差もない。

第24表 B(8)個人的思索を嫌らうのは不可とする意見に対して・男女別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
男	21	31	24	17	6%	760	3.44	1.19
女	16	37	26	14	5	265	3.46	1.08
計	20	32	25	16	6	1025	3.44	1.16

評定値, 5(全く賛成), 1(全く反対)
5+4(男)-5+4(女), $x^2=0.234$

第25表 B(4)カンニングを罪悪視しないのは不可とする意見に対して・男女別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
男	50	19	18	7	5%	761	4.01	1.22
女	45	24	19	7	3	265	4.03	1.10
計	48	20	19	7	5	1026	4.02	1.18

評定値, 5(全く賛成), 1(全く反対)
5+4(男)-5+4(女), $x^2=0.133$

2. 大学別比較 同上、何らの差もない。

3. 学年別比較 1年から3年にかけて賛成度が漸減して4年に及んでいるが(第26表)、特に1年から2年にかけて女子に「全く賛成」

2. 大学別・学年別比較 何らの有意差もみられなかったので結果は省略する。

(4) 現代の学生がカンニングを罪悪視しないのはよくないとする一般意見をどう思うか(5点尺度・1項選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的には一般意見の支持は68%、反対12%で、評定平均値は一般意見支持が大きいが、性差もなく(第25表)、文理差もない。

第26表 B(4)同上・学年別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
1年	55	18	14	7	5%	313	4.12	1.20
2年	46	21	18	9	4	233	3.99	1.17
3年	44	21	22	7	6	261	3.91	1.21
4年	47	21	22	6	3	219	4.05	1.10

5+4(1年)>5+4(3年), $x^2=4.695*$
5+4(3年)-5+4(4年), $x^2=0.782$

16) 文科系(計), M=3.42, SD=1.37, 計における5+4, 男(49%)—女(51%), 理科系(計), M=3.43, SD=1.34, 計における5+4, 男(49%)<女(63%)*

17) 甲, 男(52%)<女(64%)*

18) M, 1年(3.53) 2年(3.41) 3年(3.36) 4年(3.39), 5+4, 1年(53%)—4年(46%)

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

が急減していることは、¹⁹⁾ 既述の様に女子に勉学尊重の態度の低下が著しいことから安易な考え方に流れるためと思われる。

4. 所見 単位主義への容認の傾向と上述の結果を考えあわせると、現実には学年とともに「単位かせぎ」のためにカンニングも必要悪の一つとして容認する傾向にあるとみられる。

(5) カンニングをなくするには何が大切か (2項選択)。

1. 男女別・文理別比較 全般的には学生の自覚・自治 (計65%) よりも単位制・試験方法・教官監督等の改善という他律的方法に依存する考え方 (計80%) が強く、また、男子が単位制を、女子が試験方法を問題視するところに順位上からの性差がみられ (第27表)、なお、順位上の文理差はないが、文科系が個人的自覚を、理科系が単位制を問題視するところに若干の相違がみられる。²⁰⁾

第27表 B(5)カンニングをなくするには・男女別

選択肢 (2項選択)	男	女	計
1. どうにもならない	3%	3%	3%
2. 個人的自覚による	61	62	62
3. 学生の自治的監督	3	3	3
4. 教官の厳しい監督	10	7	10
5. 試験方法改善	33	38	34
6. 単位制改善	37	32	36
7. よくわからない	1	4	2
8. その他	6	3	5
9. 無記入	44	48	45
例数 (100%)	770	269	1039

r=0.500

2. 大学別・学年別比較 特に注目される差はない。

3. 所見 勉学倫理ともいうべきこの問題を自らの自覚に帰する考え方は過半数のものに残されているとしても、なお、他律的な考え方が強く、特に勉学倫理と単位制との関連する現実が注目されねばならないと思われる。

(C) 学生自治活動について

(1) 現代の学生が自治会の名で政治活動をやるのはよくないとする一般意見をどう思うか

(5点尺度・1項選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的には一般意見の支持34%、反対51%で、評定平均値は「やや反対」の方によっているが、性差はなく (第28表)、また、文科系の方が一般意見の方に傾むいている。²¹⁾ なお、文・理科系ごとの性差はない。

第28表 C(1)自治会の名による政治活動は不可とする意見に対して・男女別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
男	18	17	15	25	25%	769	2.77	1.44
女	7	25	12	40	16	268	2.68	1.22
計	15	19	14	29	22	1037	2.75	1.39

評定値, 5 (全く賛成), 1 (全く反対)
5+4 (男)-5+4 (女), $\chi^2=0.554$

2. 大学別比較 甲に比べて乙・丙に一般意見への賛成が多く、評定平均値では乙・丙・丁ともに「賛否を何ともいえない」ところに近く、甲に反対が最も強い (第29表)。また、大学ごとの性差はない。

19) 女子, 「全く賛成」, 1年(59%) > 2年 (33%) **

20) 個人的自覚, 文(65%), 理 (57%), 単位制改善, 文(30%) 理 (45%), 文理の間 $r=0.925$ **

21) M, 文(2.81) 理(2.66), 5+4, 文(37%) > 理(30%) **

第29表 C(1)同上・大学別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
甲	13	15	13	30	29%	569	2.52	1.38
乙	19	24	17	27	14	344	3.06	1.34
丙	14	25	13	32	16	71	2.90	1.33
丁	17	21	21	30	11	53	3.02	1.28

5+4(甲)<5+4(乙), $x^2=19.482$ * *
 5+4(甲)<5+4(丙), $x^2=4.031$ *
 5+4(甲)-5+4(丁), $x^2=2.268$

第30表 C(1)同上・学年別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
1年	18	19	15	28	20%	316	2.86	1.41
2年	11	19	14	29	26	237	2.60	1.35
3年	13	16	15	31	24	262	2.63	1.36
4年	17	22	14	28	19	222	2.89	1.40

5+4(1年)-5+4(2年), $x^2=2.658$
 5+4(3年)<5+4(4年), $x^2=4.703$ *

に極めて少く、賛成は、学生と社会人とを区分した選良意識に立つD項と個人主義・自由主義を

第31表 C(2)同上一般意見への賛否の理由・男女別

賛 成			反 対		
理 由	男	女 計	理 由	男	女 計
A. 大学の政治的公正を失う	2	1 1%	A'. 大学中立は保守派を利する	2	2 2%
B. 個人を強制して批判力を失わせる	38	42 39	B'. 社会人として実践で学ぶべきである	25	30 26
C. 学生の本分にもとめるので卒業後にすべきだ	11	13 11	C'. 学生はその権利をもち、やむをえぬこともある	58	54 57
D. 学生自治の特権乱用	48	44 47	D'. 自治活動は政治活動と区別しえない	11	12 12
E. その他	3	0 2	E'. その他	3	1 3
F. 無記入	0	0 0	F'. 無記入	1	1 1
例数 (100%)	266.	86. 352.	例数 (100%)	386.	149. 535

各理由は選択肢の要約

2. 大学別・学年別比較 甲において理科系にB項の賛成が多い文理差、及び、学年別比較において女子にD項の賛成が3年から4年へ急増し、C'項の反対が1年では男子より少いの²²⁾に2年²³⁾から4年へと男子を超えて漸増していること等を²⁴⁾除いては見るべきものがない。

3. 所見 大学のありかたをめぐる賛否が少いことは大学共同体の一員としての役割意識

22) B項, 賛成, 甲, 文(28%)<理(45%) *

23) D項, 賛成, 女子, 3年(33%)<4年(77%) *

24) C'項, 反対, 1年, 男(62%)>女(42%) * *, 女子, 1年(42%)<4年(68%) * *

3. 学年別比較 評定平均値からみて2・3年で反対が強く(第30表), また, 学年ごとの性差はない。

4. 所見 全般的に一般意見反対の傾向にあることは現代学生の政治的関心と社会意識の旺盛なことを意味し, それが旧帝大の甲, 「知識・技能を吸収したい」気持が強い理科系, 入学・就職期から隔った2・3年等において強いことは夫々注目される。

(2) 同上の一般意見に対する賛否の理由 (1項選択)

1. 男女別・文理別比較 賛否の理由が多少, 対照的になるような選択肢を設定したが, 大学のありかたをめぐるA項の理由は賛否とも

ふまえたB項が多く, 所謂良識的な学生本分論C項がこれらに次ぎ, 反対は啓蒙的人権意識に近いC'項が過半数を占め, 社会主義・行動主義に連なるB'項, 学生と社会人とを区分しない民衆意識に立つD'項がこれに次いでいることが注目される(第31表), 性差・文理差はない。

の低調さを物語るものであり、さらに、賛成者が所謂 old academism に通じる B・D 項の考え方に多く立っているのに対して、反対者は大学共同体を超えた社会全体に直接に結びついた生活意識を背景に一種の政治的エリートたらしとする新しい先覚者的役割意識が強いと解される。

(3) 現代の学生が学外で非法学生運動をやるのはよくないとする一般意見をどう思うか。(5点尺度・1項選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的には一般意見の支持51%，反対30%で、前者設問の場合と逆に評定平均値が一般意見賛成の方に傾いており、性差はないが、賛否のひらきが男子の方にやや認められる(第32表)。なお、文理差、文・理科系ごとの性差はない。

2. 大学別比較 乙は甲より一般意見賛成が多く、平均値では丁も賛成が多い(第33表)。また、大学ごとの性差はない。

3. 学年別比較 自治会の政治活動の場合と同様に2・3年で一般意見への賛成度が低く、卒業をひかえた4年でそれが非常に高くなっていく(第34表)。

4. 所見 既述(1)の結果をも考えると、自治会の政治活動や学外非合法活動を支持する所謂進歩的意識は、甲で最も強く、同じ国立大学の丙がこれに次ぎ、私立大学(乙)、公立大学(丁)が少々弱く、また、そうした意識が2・3年で強くて4年で弱くなることが注目される。

(4) 同上の一般意見に対する賛否の理由(1項選択)。

1. 男女別・文理別比較 賛成は現存社会への順応を重んじるA項、次に良識的學生本分論C項に多く、反対は社会の急

第32表 C(3)学外の非法学生運動は不可とする意見に対して・男女別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
男	28	23	18	19	11%	767	3.38	1.37
女	19	29	23	23	5	268	3.36	1.17
計	26	25	19	20	10	1035	3.37	1.32

評定値, 5(全く賛成), 1(全く反対),
5+4(男)-5+4(女), $x^2=0.544$

第33表 C(3)同上・大学別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
甲	21	23	21	21	13%	568	3.17	1.34
乙	32	30	17	17	5	343	3.68	1.21
丙	24	23	16	27	11	71	3.21	1.36
丁	38	17	26	17	2	53	3.72	1.19

5+4(甲)<5+4(乙), $x^2=27.450$ * *
5+4(甲)-5+4(丙), $x^2=0.133$
5+4(甲)-5+4(丁), $x^2=2.169$

第34表 C(3)同上・学年別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
1年	26	24	21	21	8%	316	3.39	1.30
2 //	22	23	22	21	11	236	3.25	1.32
3 //	23	23	20	22	11	261	3.26	1.33
4 //	32	30	14	15	9	222	3.62	1.30

5+4(1年)-5+4(2年), $x^2=0.971$
5+4(2年)-5+4(3年), $x^2=0.047$
5+4(3年)<5+4(4年), $x^2=11.476$ * *

第35表 C(4)同上一般意見への賛否の理由・男女別

理由	賛成			反対			
	男	女	計	理 由	男	女	計
A. 法, 秩序の軽視	61	53	59%	A'. 正しい目的のためにはやむをえない	60	70	62%
B. 保守派に逆用される口実を与える	5	5	5	B'. 社会に訴える効果がある	18	18	18
C. 学生の本分にもとめる	28	38	30	C'. 学生の基本的権利である	10	8	10
D. その他	7	4	6	D'. その他	11	4	9
E. 無記入	0	0	0	E'. 無記入	0	0	0
例数 (100%)	395	131	526	例数 (100%)	234	74	308

各理由は選択肢の要約

進的改革を重んじるA'項, 次に戦略的考慮に立つB'項, 人権意識に連なるC'項に多い傾向があり(第35表), また, C項の賛成が女子に多い²⁵⁾性差, C項の賛成が文科系に多い文理差がある²⁶⁾。

第36表 C(4)同上・大学別

	賛 成					反 対			
	甲	乙	丙	丁		甲	乙	丙	丁
A	65	53	46	59%	A'	65	59	59	50%
B	6	3	6	10	B'	17	22	19	20
C	22	39	39	28	C'	10	8	15	0
D	7	5	9	3	D'	9	11	7	20
E	0	1	0	0	E'	0	0	0	10
例数 (100%)	251	213	33	29	例数 (100%)	198	73	27	10

第37表 C(4)同上・学年別

	賛 成					反 対			
	1年	2年	3年	4年		1年	2年	3年	4年
A	51	57	64	64%	A'	66	58	64	60%
B	3	5	6	7	B'	27	13	12	21
C	42	31	22	23	C'	3	16	13	8
D	4	7	8	7	D'	4	13	11	11
E	0	1	0	0	E'	0	0	1	0
例数 (100%)	158	108	122	138	例数 (100%)	93	76	86	53

が(2)の場合と同様にそれほど支配的とならないことが注目される。

(D) 一般の生活態度について

(1) 将来どのような生活を望んでいるか

(1項選択)。

1. 男女別・文理別比較 全般的結果について各選択肢を総合して A. 現実主義的(1+2), B. 小市民的(3+4), C. 理想主義的(5+6), D. 懐疑的(7)な生活態度として要約してみると, C(41%), B(27%), A(17%), D(14%)の順に多く, C項が女子に, A項が男子に多い性差があり(第38表), また,

2. 大学別比較 賛成はA項で甲が乙・丙

より多く, C項で乙・丙が甲より多く, A・C項とも甲・丁間には差がない(第36表)²⁷⁾。反対は丁の例数も少く, 見るべきものはない。

3. 学年別比較 賛成はA項で1年から3

年へ漸増し, C項で漸減の状況にあり, 反対は1年にB'項が多くてC'項が少い傾向が注目される(第37表)²⁸⁾。

4. 所見 既述(2)の結果と比べると, 賛

成者では現存社会への順応の尊重と良識的學生本分論が強く抬頭し, 反対者では急進的社会改革の立場が過半数を占めており, これは設問(4)の問題設定からみて当然と思われるが, また, 状況によって両極の社会意識が強く現われてくることを意味し, この際においても學生本分論

第38表 D(1)生活態度・男女別

選 択 肢 (1項選択)		男	女	計
A	1. 経済的に裕福で生活に不自由がない	16%	7%	14%
	2. 有名になり世の中に知られる人になる	3	0	3
B	3. 社会のためより自分の好みにあったくらし	15	13	15
	4. 呑気でその日その日が楽しいくらし	13	10	12
C	5. 世のため人のため自分を犠牲にする	4	2	3
	6. 良心に恥じぬよう清く正しく生きる	33	51	38
D	7. そ の 他	14	15	14
	8. 無 記 入	2	2	2
例 数 (100%)		770	269	1039

A, 男>女, $x^2=22.204^{**}$, B, 男一女, $x^2=2.177$
C, 男<女, $x^2=21.918^{**}$

25) C項, 男<女*

26) C項, 文(34%)>理(24%)*

27) A項, 甲>乙**, 甲>丙*, 甲-丁, C項, 甲<乙**, 甲<丙*, 甲-丁

28) A項, 1年<3年**, C項, 1年>3年**

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

そうした性差は文理ともに同じ傾向にあるが、²⁹⁾
C項が文科系（計）に多くて、A項が理科系（計）に多い傾向の文理差がある（第39表）。

2. 大学別比較 甲に比べて、乙でC項が多く、丁でA項が少く、甲・丙間に差がない（第40表）。また、C項が女子に、A項が男子に多い性差の一般傾向は丁以外の大学にほぼ共通している。³⁰⁾

3. 学年別比較 A項が2・4年で少く、

第39表 D(1)同上・文理別

		A	B	C	その他	例数 (100%)
文	男	18%	28%	39%	15%	338
	女	6	25	53	17	176
	計	14	27	44	15	514
理	男	20	27	35	18	400
	女	6	22	48	24	54
	計	18	27	36	19	454

A, 文—理, $x^2=2.961 \times$

B, 文—理, $x^2=0.004$

C, 文>理, $x^2=5.821 *$

第40表 D(1)同上・大学別

同上	甲	乙	丙	丁	
A {	1.	13%	15%	18%	9%
	2.	3	2	1	4
B {	3.	14	14	17	19
	4.	13	12	11	13
C {	5.	4	2	3	2
	6.	34	44	42	34
D -	7.	17	11	7	17
	8.	3	1	0	2
例数 (100%)	571	344	71	53	

A, 甲—乙, $x^2=0.258$, 甲—丙, $x^2=0.800$

甲>丁, $x^2=36.470 **$

B, 甲—乙, $x^2=0.212$, 甲—丙, $x^2=0.045$

甲—丁, $x^2=0.635$

C, 甲<乙, $x^2=7.075 **$, 甲—丙, $x^2=1.614$

甲—丁, $x^2=0.043$

第41表 D(1)同上・学年別

同上	1年	2年	3年	4年	
A {	1.	16%	9%	18%	2%
	2.	2	2	3	10
B {	3.	12	17	13	5
	4.	14	8	13	16
C {	5.	4	5	2	10
	6.	36	39	35	11
D -	7.	14	18	13	35
	8.	2	2	2	10
例数 (100%)	317	238	262	222	

A, 1年>2年, $x^2=6.194 *$

2年<3年, $x^2=9.313 **$

3年>4年, $x^2=7.426 **$

B, 1年—2年, $x^2=0.067$, 2年—3年, $x^2=0.147$

3年—4年, $x^2=1.692$

C, 1年—2年, $x^2=0.738$, 2年—3年, $x^2=2.509$

3年>4年, $x^2=14.211 **$

B項はほぼ一定し、C項が4年で少くなって、D項が4年で増えている（第41表）。また、前述の性差は各学年にも共通する傾向の様³¹⁾にみられるが、男子において3年で現実主義的態度を、4年で懐疑的態度を増し、女子では3・4年で小市民的幸福追求の態度が深まりながら、1・2年における理想主義的態度が漸次減少してきていることが注目される（第42表・第4図）。

29) 文科系, A. 男(18%)>女(6%)**, B. 男(28%)—女(25%), C. 男(39%)<女(53%)**

理科系, A. 男(20%)>女(6%)*, B. 男(27%)—女(22%), C. 男(35%)—女(48%)×

30) 甲, A. 男(18%)>女(6%)**, C. 男(35%)<女(49%)**

乙, A. 男(21%)>女(7%)**, C. 男(42%)<女(57%)*

丙, A. 男(28%)—女(13%), C. 男(28%)<女(59%)**

丁, A. 男(21%)—女(4%), C. 男(28%)—女(46%)

31) 1年, A. 男(21%)—女(12%)×, C. 男(36%)<女(51%)*

2年, A. 男(14%)—女(5%)×, C. 男(38%)<女(56%)**

3年, A. 男(26%)>女(3%)*, C. 男(32%)<女(54%)**

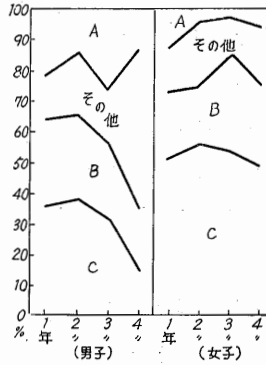
4年, A. 男(13%)—女(6%), C. 男(14%)<女(49%)**

第42表 D(1)同上・学年男女別

	A	B	C	その他	例数 (100%)
1年 { 男	21%	28%	36%	15%	231
{ 女	(12)	(21)	(51)	(16)	(86)
2年 { 男	14	28	38	20	163
{ 女	(5)	(19)	(56)	(20)	(75)
3年 { 男	26	25	32	16	201
{ 女	(3)	(31)	(54)	(12)	(61)
4年 { 男	13	21	14	52	175
{ 女	(6)	(26)	(49)	(19)	(47)

C, 2年(男) > 4年(男), $\chi^2=24.902$ * *

第4図D(1)同上・学年男女別
(比例配分)



4. 所見

前述した通り理想主義態度が3年から後に減少している傾向があるにも拘らず、なお全般的にはこの態度が最も多く、数年前と比べて特に個人的立場における理想主義が増大していることは時代の安定を反映するものとして注目される。なお、女子に理想主義的態度が多く、男子がやや現実的であるという性差は文理別・大学別・学年別に相関していないので、こうした差は一般に大学に進む青年男女の心理特性の相違を示していると思われる。

理想主義が増大していることは時代の安定を反映するものとして注目される。なお、女子に理想主義的態度が多く、男子がやや現実的であるという性差は文理別・大学別・学年別に相関していないので、こうした差は一般に大学に進む青年男女の心理特性の相違を示していると思われる。

(2) 現在、最も楽しみを感じていることは何か (1項選択)

第43表 D(2)最も楽しみを感じること・男女別

選択肢(1項選択)	男	女	計
1. 何もない	6%	5%	6%
2. 勉学, 読書	11	11	11
3. 恋愛	6	8	6
4. 宗教	0	0	0
5. 学生運動	1	0	1
6. サークル等の集団活動	26	29	27
7. 個人的交友	17	18	17
8. 個人的趣味教養	17	20	18
9. 碁・麻雀・映画等の娯楽	9	3	7
10. その他	6	3	5
11. 無記入	2	2	2
例数 (100%)	770	269	1039

$r=0.777$ * *

1. 男女別・文理的比較 全般的には「個人的な交友・趣味教養」(7+8)が最も多く、「サークル等の集団活動」がこれに次いで重要であり、また、順位上の性差はなく(第43表)、なお、文理差もない。

第44表 D(2)同上・大学別

同上	甲	乙	丙	丁
1.	5%	7%	7%	6%
A - 2.	14	7	10	6
3.	7	6	6	6
4.	0	0	0	2
5.	1	0	0	0
B { 6.	26	26	28	43
{ 7.	17	19	14	9
C { 8.	16	21	27	17
{ 9.	7	8	7	2
10.	5	5	1	9
11.	3	1	0	0
例数 (100%)	571	344	71	53

A, 甲 > 乙, $\chi^2=10.108$ *, 甲-丙, $\chi^2=0.860$
 甲-丁, $\chi^2=2.839$ ×
 B, 甲-乙, $\chi^2=0.302$, 甲-丙, $\chi^2=0.011$
 甲-丁, $\chi^2=2.839$ ×
 C, 甲-乙, $\chi^2=3.646$ ×, 甲 < 丙, $\chi^2=3.914$ *
 甲-丁, $\chi^2=0.498$

32) 昭34. 京都市内, 国公立7大学, 計1273名に対する筆者らの調査では, 同じ第6項目について13% (京都大学人性研究会報告資料, 昭35. 未刊), 昭33~34. 全国, 国公立・短大58大学, 計600名に対する学生問題研究所の調査では, 「自己の人間形成を重視する」生活態度として23% (同研究報告第1冊, 昭35. p. 114)

33) 文理差 $r=0.809$ * *

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

2. 大学別比較 甲に比べて、乙はA項「勉学・読書」が少くて、C項「趣味教養・娯楽」(8+9)が多い傾向にあり、丙は乙に似ており、丁はA項「勉学・読書」が少くて、B項「サークル・交友」(6+7)が多い傾向にある(第44表)。

3. 学年別比較 1・2年では「サークル・交友」が多く、3・4年ではそれが減じて「趣味教養・娯楽」が増している以外に注目すべき変化はない。³⁴⁾

4. 所見 「個人的な交友・趣味教養」が多いのは前述(1)の結果にみられる個人的理想主義や小市民的生活態度の多い傾向が反映しているものと解され、一面、「サークル等の集団活動」がそれほど多くない上に「学生運動」が極めて少いことはそうした個人的な生活態度の社会化の機会が殆どの学生に乏しいことを意味するが、それにも拘らず政治運動をめぐって旺盛な社会意識が明確な形をとってくることは、そうした政治的社会意識が社会化された生活態度の裏うちを欠いた多分に観念的なものであることを物語ってしよう。

(3) 現代の学生に夢がないのはよくないとする一般意見をどう思うか(5点尺度・1項選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的には一般意見の支持61%、反対16%で、評定平均値は一般意見支持に偏っており(M=3.70)、性差・文理差はない。

2. 大学別比較 丙において女子の方に一般意見支持が多い³⁵⁾以外は見るべきものはない。

3. 学年別比較 評定平均値の漸減傾向³⁶⁾からみて、学年とともに支持が低下していることは明らかである。これは前述(1)に示めた理想主義的生活態度の漸減傾向を反映するものと解される。

(4) 多くの青年の中から選ばれた一人であることをどう思うか(1項選択)

第45表 D(4)多くの青年の中から選ばれたことをどう思うか・男女別

選 択 肢 (1項選択)	男	女	計
1. 選ばれた実感がない	44%	38%	42%
2. 学生としての誇り	14	12	13
3. 学生としての責任	33	45	37
4. 迷惑、ひげめを感じる	3	2	2
5. そ の 他	5	3	4
6. 無 記 入	2	1	2
例 数 (100%)	770	269	1039

1, 男<女, $\chi^2=2.794^*$
3, 男<女, $\chi^2=12.341^*^*$

第46表 D(4)同上・文理別

同	上	文	理
1. 選ばれた実感がない		39%	45%
2. 学生としての誇り		14	13
3. 学生としての責任		39	33
4. 迷惑、ひげめを感じる		2	3
5. そ の 他		5	4
6. 無 記 入		1	3
例 数 (100%)		514	454

1, 文<理, $\chi^2=4.109^*$
3, 文>理, $\chi^2=4.689^*$

1. 男女別・文理別比較 全般的には「選ばれた実感をもつ」(2+3+4+5)が56%に及び、その中で「学生としての責任」が半ば以上を占めて特に女子に多く、また、「選ばれた実感がな

34) B項, 1年(49%) 2年(50%) 3年(37%) 4年(39%), 2年>3年*
C項, 1年(21%) 2年(22%) 3年(32%) 4年(28%), 2年<3年*

35) 丙, 賛成(5+4), 男(47%)<女(72%)*

36) M, 1年(3.80) 2年(3.65) 3年(3.68) 4年(3.61), 1年>4年*

い」が男子に多い傾向がある(第45表)。こうした性差の傾向は既述した男女の生活態度の相違によるとも解される。また、「選ばれた実感がない」が理科系に、「学生としての責任」が文科系に多い文理差がみられる(第46表)。

2. 大学別比較 各項について全般的に各大学間の差はないが、前述した女子の特徴が特に甲・丙の国立大学にみられるとともに、「選ばれた実感がない」が丙の男子に多い性差³⁷⁾がみられる。

3. 学年別比較 「学生としての責任」が1年から2年に増して以後、漸減していること³⁸⁾以外には注目すべきものはない。

4. 所見 この設問は、A(3)が「自分の大学」に対する誇りを問うているのと異り、「一般青年」との関係において問うているが、調査結果において自分の大学を意識した時は誇りに大学差が鮮明に現われるのに、一般青年との関係においてはその大学差が現われないことは、現代学生のエリート意識が専ら学生間の優劣感に限局されたものに化していることを意味するものと思われる。また、「自分の大学」への誇りが2年で低下しつつ「学生としての責任」が2年で上昇していることは、この頃に味う学生生活の幻滅がエリート意識を低下させる一方、対社会的に学生が目ざめさせられつつあることを伴っている点で注目される。

(5) 現代の学生がエリート意識をもつことについてどう思うか(5点尺度・1項選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的には可とするもの24%、不可とするもの44%で、評定平均値は不可に偏り、男子の方がエリート意識肯定の気持が多い傾向にある(第47表)。また、文理差はないが、文理ごとの性差ではエリート意識肯定の男子の傾向が文科系で有意差をみせている³⁹⁾。

第47表 D(5)エリート意識をもつことについて・男女別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
男	3	22	31	32	11%	757	2.75	1.02
女	1	18	31	36	11	261	2.61	0.96
計	3	21	31	33	11	1018	2.71	1.01

評定値, 5(非常によい), 1(非常によくない)
 $5+4(\text{男})-5+4(\text{女}), x^2=3.151 \times$

第48表 D(5)同上・大学別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
甲	3	25	32	30	10%	566	2.81	1.01
乙	3	17	28	37	13	333	2.59	1.01
丙	1	9	39	37	7	66	2.58	0.82
丁	4	17	34	32	13	53	2.66	1.03

$5+4(\text{甲}) > 5+4(\text{乙}), x^2=6.257 *$
 $5+4(\text{甲}) > 5+4(\text{丙}), x^2=9.181 **$
 $5+4(\text{甲}) - 5+4(\text{丁}), x^2=1.251$

値は不可に偏り、男子の方がエリート意識肯定の気持が多い傾向にある(第47表)。また、文理差はないが、文理ごとの性差ではエリート意識肯定の男子の傾向が文科系で有意差をみせている³⁹⁾。

2. 大学別比較 評定平均値でみてもエリート意識肯定が旧帝大の甲に多いことは当然と思われ、また、丙に肯定・否定のひらきが少なくて否定の方への偏りが大きいことは自分の大学へのひけめの合理化としても注目される(第48表)。

3. 学年別比較 2年で肯定が男子の方に多い性差⁴⁰⁾の外には学年間に変化はみられない。

4. 所見 エリート意識を不可として自ら限定しようとする意識が甲以外に一般的にみられることは、社会人としての位置づけをえら

37) 3, 甲, 男(33%) < 女(44%) *, 丙, 男(28%) < 女(51%) *, 1, 丙, 男(63%) > 女(39%) *

38) 3, 1年(34%) 2年(46%) 3年(35%) 4年(32%), 1年 < 2年 **, 2年 > 4年 **

39) 文科系, 5+4, 男(29%) > 女(19%) *

40) 2年, 5+4, 男(29%) > 女(16%) *

れる役割を学ぼうとする努力の一般化に外ならないが、この点、伝統に執着的な旧帝大甲では、むしろ「単に学生であること」の地位にあぐらをかいて過去の特権的役割を享受しようとする傾向が残っているといわざるをえない。

(6) アルバイトをした理由(1項選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的結果によれば、これまでに「アルバイト経験をもつ」ものは約85%にも及び、アルバイトが一般化したものと思われるが、その中で「純然たる経済的理由」(2+3)は47%で、アルバイトの半ばを占めるだけであって、その他の37%は「実社会に学ぼうとする理由」(5+7)や、経験の伸長拡大を求めて「大いに青春を楽しみたい」気持が強いことは注目される。これは今日、一般化している学生アルバイトが、男子の方に経済的理由が多い傾向を残しているとしても、もはや往年の「苦学」の意味を失いつつあり、アメリカ式に実社会にふれる様々な機会を獲得・拡大しようとする目的性を強めつつあるものと解される(第49表)。また、文理差については、「経済的理由」が理科系に多い傾向、「実社会に学ぼうとする理由」が文科系に多い傾向があり(第50表)、なお、経済的理由が男子の方に多い傾

第49表 D(6)アルバイトの理由・男女別

選択肢(1項選択)	男	女	計
1. アルバイト経験はない	14%	16%	14%
2. 経済的困難で止むをえない	19	12	17
3. 少々ゆとりがほしい	30	31	30
4. 大いに青春を楽しみたい	10	10	10
5. 生活の必要よりも勉学修養になるので	19	22	19
6. 唯、皆がやっているの	1	2	1
7. 働くことやその仕事が好きで	2	2	2
8. その他	4	6	5
9. 無記入	1	1	1
例数(100%)	770	269	1039

2+3, 男一女, $\chi^2=3.742 \times$, 5+7, 男一女, $\chi^2=1.001$

第50表 D(6)同上・文理別

同	上	文	理
1. アルバイト経験はない		16%	14%
2. 経済的困難で止むをえない		17	19
3. 少々ゆとりがほしい		29	33
4. 大いに青春を楽しみたい		9	10
5. 生活の必要よりも勉学修養になるので		20	17
6. 唯、皆がやっているの		1	1
7. 働くことやその仕事が好きで		2	1
8. その他		5	5
9. 無記入		1	1
例数(100%)		514	454

2+3, 文一理, $\chi^2=3.299 \times$

5+7, 文一理, $\chi^2=3.323 \times$

41) 向が文科系で有意な性差をみせている。

2. 大学別比較 「経済的理由」は、甲が

第51表 D(6)同上・大学別

同	上	甲	乙	丙	丁
1. アルバイト経験はない		14%	19%	6%	8%
2. 経済的困難で止むをえない		23	10	17	11
3. 少々ゆとりがほしい		36	22	25	38
4. 大いに青春を楽しみたい		8	11	11	9
5. 生活の必要よりも勉学修養になるので		14	25	34	26
6. 唯、皆がやっているの		1	2	0	0
7. 働くことやその仕事が好きで		1	3	6	4
8. その他		4	7	1	4
9. 無記入		1	1	0	0
例数(100%)		571	344	71	53

2+3, 甲>乙, $\chi^2=59.080 **$

甲>丙, $\chi^2=6.784 **$

甲一丁, $\chi^2=1.769$

5+7, 甲<乙, $\chi^2=22.932 **$

甲<丙, $\chi^2=26.247 **$

甲<丁, $\chi^2=8.368 **$

41) 文科系, 2+3, 男(49%)>女(39%)*

最多で、乙・丙より多く、乙が最少であり、国立総合大学甲と私立総合大学乙における学生出身階層の大きい隔差が示唆されている。また、「実社会に学ぼうとする理由」は丙が最多で、乙・丙・丁が甲より多い(第51表)。

第52表 D(6)同上・学年別

同	上	1年	2年	3年	4年
1. アルバイト経験はない		26%	11%	7%	10%
2. 経済的困難で止むをえない		16	17	20	20
3. 少々ゆとりがほしい		22	33	36	33
4. 大いに青春を楽しみたい		9	9	11	9
5. 生活の必要よりも勉学修養になるので		20	21	18	21
6. 唯、皆がやっているので		1	0	1	2
7. 働くことやその仕事が好きで		3	3	2	1
8. その他		2	6	6	5
9. 無記入		2	0	0	0
例数 (100%)		317	238	262	222

2+3, 1年<3年, $x^2=18.321$ * *
 3年-4年, $x^2=0.232$
 5+7, 1年-3年, $x^2=0.741$
 3年-4年, $x^2=0.343$

化する影響があろうと思われる。また、この点、エリート意識温存の傾向が強い甲において逆に「苦学」への傾向が深まりつつあることもまた注目すべきであろう。

(7) アルバイトに対する誇り、ひけめの程度 (5点尺度・1項選択)

第53表 D(7)アルバイトに対する誇り、ひけめの程度・男女別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
男	3	18	71	7	1%	657	3.15	0.60
女	5	18	71	4	0	222	3.25	0.63
計	3	18	71	6	1	879	3.18	0.61

評定値, 5(非常に誇り), 1(非常にひけめ)
 5+4(男)-5+4(女), $x^2=0.894$

が最も少く、乙がこれに次ぎ、新しい大学丙・丁で多い傾向にある。

3. 学年別比較 学年とともに「経済的理由」が漸増していることは、学生出身階層に中産階級が多いために就学に無理が重ねられていることを示唆している(第52表)。一方、「実社会に学ぼうとする理由」は各学年を通じて一定しているが、特に女子で学年とともに漸増していることは注目される。⁴²⁾

4. 所見 現在におけるアルバイトの経済的必要度は昭和30年頃⁴³⁾に比べて甲・丁で増加、乙・丙で減少の傾向にあるが、そうした傾向と別箇に、現在のアルバイトが「苦学」の意味をかえつつあることは「学びつつ働く」のを当然として学生と社会人との地位意識の境界を稀薄

1. 男女別・文理別比較 一般的には「何も感じない」が過半数であり、平均値では「誇り」の方に偏りが若干みられるが、性差もなく、(第53表)、文理差もない。また、文理ごとの性差もない。⁴⁵⁾

2. 大学別比較 平均値では甲で「誇り」⁴⁶⁾

42) 女子, 5+7, 1年(16%) 2年(24%) 3年(26%) 4年(32%), 1年<4年*

43) 昭30. 全国205大学への調査では、5大都市における国立大学で、「アルバイトしないと学業継続困難」17%、「同、生活が不自由」40%、計約57%、同、公立大学で、前者12%、後者30%、計約42%、同、私立大学で前者9%、後者29%、計約38%、(文部省学生課編、昭和29・30年度学生生活調査報告書、昭31, P. 46)

44) 例えば、京都大学では、「アルバイトしないと学業継続困難」21%、「同、生活が不自由」36%(昭30)が前者39%、後者46%(昭38)にふえている(京都大学学生部編、学生生活実態報告、昭30, p. 11, 昭38, p. 6)

45) 文科系, M(3.19) SD(0.61), 理科系, M(3.15) SD(0.61)

46) M, 甲(3.13)乙(3.22)丙(3.27)丁(3.29), 5+4, 甲(19%)<乙(25%)*

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

3. 学年別比較 平均値では1年で「誇り」が最も多く、それ以後では誇りが漸減の傾向にある。⁴⁷⁾

4. 所見 1年は学生になったばかりの時期にあるので「学生であること」の地位への意識が大きく、アルバイトにも「誇り」が多くもたれるが、学年とともに学生としての地位意識が稀薄化してアルバイトへの誇りも漸減してゆくものと解される。また、旧制以来の大学甲・乙でアルバイトへの「誇り」が少く、新制以来の大学丙・丁でそれが多いことは、一面では甲・乙で「ひけめ」が多く、丙・丁で「ひけめ」が少ないことを伴っており、ここに、地位意識が低い丙・丁ではアルバイトに積極的に反応するのに対して、地位意識が高い甲・乙ではアルバイトに消極的に反応していることが注目される。

(E) 社会との関連において

(1) 現代社会が学生にどのようなことを要請していると感じるか(1項選択)

1. 男女別・文理別比較 設問A(1)の結果とともに全般的結果を併記すると次の通りである。

1. 何も要請していない	3%(4%)	6. 人類の理想社会をつくる	9%(6%)
2. 専心、真理を探究すること	3%(14%)	7. よくわからない	6%(2%)
3. 勉学と教養	49%(62%)	8. その他	3%(5%)
4. 良い職業人となり役立つこと	23%(6%)	9. 無記入	1%(3%)
5. 国家、民族の運命を双肩になう	2%(1%)		

但し、()内はA(1)における対応的項目の結果。

両者結果を比べると、社会的要請では2・3項が減じて4項が増し、職業適応をやや重んじる傾向がみられ、性差・文理差には見るべきものがない。

2. 大学別比較 甲に比べて乙では「勉学と教養」が多くて「良い職業人」が少ないが、これはA(1)でも同様の傾向があり、乙は甲よりも社会的要請と学生本分論との間の隔差が少く、所謂社会的良識に富んでいると解される。なお、甲に比べて丙・丁では差はない。⁴⁹⁾

3. 学年別比較 学年差はないが、女子の方が3年で「勉学と教養」が多くなる傾向を示めた後、4年で「良い職業人」が多くなる性差がみられる。⁵⁰⁾

(2) 今の大人たちに対する不満は何か(1項選択)

1. 男女別・文理別比較 学生をとりまく四つの社会連帯関係においてみると、全般的には(イ)親たちの社会的視野狭小・出世主義、(ロ)大学の教授の非教育的態度、(ハ)指導者層の社会よりの離反、(ニ)民衆の無定見・低水準等への不満が顕著であり、そこに家族的閉鎖性・利己主義よりの離脱と自己の形成とを重んじる学生共通の心理特性、及び、民衆と共にあってそれを啓蒙してゆこうと望んでいる民主的指導者への役割意識が多くみられる(第54表)。さらに性差としては、

47) M, 1年(3.30)2年(3.14)3年(3.13)4年(3.12), 5+4, 1年(29%)>2年(18%)*, 2年(18%)
-4年(20%)

48) 1+2, 甲(8%)乙(6%)丙(2%)丁(4%)

49) 3, 甲(45%)<乙(54%)*, 4, 甲(25%)>乙(19%)*

50) 3, 3年, 男(49%)—女(62%)×, 4, 4年, 男(18%)<女(32%)*

京都大学教育学部紀要Ⅺ

第54表 E(2)今の大人たちに対する不満・男女別

選択肢(1項選択)		男女計			同 左			男女計		
(イ) 世の親たちに対して	1. 子に期待し, 出世を求めすぎる	23	18	22%	(ロ) 大学の先生がたに対して	1. 教育的情熱がほしい	32	37	33%	
	2. 子を型にはめようとする	16	22	17		2. 自由さなく, 保守的	7	7	7	
	3. 子ども扱いし, 理解しようとししない	4	8	5		3. 権威的, 学生にとけこまない	30	24	28	
	4. 子どもを甘やかすすぎる	6	6	6		4. 学生におもねる傾向	2	2	2	
	5. 社会的視野が狭い	34	34	34		5. 社会的関心乏しく, 観念的	10	9	9	
	6. 別 ない	13	9	12		6. 別 ない	14	15	14	
	7. そ の 他	4	3	4		7. そ の 他	4	5	4	
	8. 無 記 入	2	2	2		8. 無 記 入	2	2	2	
(ハ) 指導者層に対して	1. 全体を考えず, 利己的	23	29	24%	(ニ) 一般民衆に対して	1. 社会への意識が低い	25	26	25%	
	2. 大衆を知らず, 遊りしている	22	25	23		2. 学生を理解しようとししない	1	0	1	
	3. 反動的, 権力によわい	8	7	8		3. 反動的, 事大的	9	13	10	
	4. 信念, 指導力にかける	20	16	19		4. 定見がなく, マスコミに支配される	37	41	38	
	5. 不健康, 偽善的, 卑劣,	20	13	19		5. 享乐的, 夢がない	18	15	17	
	6. 別 ない	2	7	3		6. 別 ない	4	2	4	
	7. そ の 他	4	2	3		7. そ の 他	4	1	3	
	8. 無 記 入	2	2	2		8. 無 記 入	1	3	2	
例 数 (100%)		770 269 1039			例 数 (100%)		770 269 1039			

(イ)では男子が出世主義を不満とする傾向を示めし, 女子が「子への親の支配」(2+3)を不満とすることが著しく,⁵¹⁾ また, こうした性差は文理ともに同じ傾向にある。⁵²⁾ なお, (ロ)(ハ)(ニ)では見るべきものはない。

2. 大学別比較 以下, 甲と比べて注目される結果乃至傾向をあげると次の通りである。

- (イ) 男「子への親の支配」(2+3), 甲(18%)>丁(0%), $\chi^2=6.451 **$
 女「同 上」 甲(23%)<乙(40%), $\chi^2=7.148 **$
 〃 「社会的視野が狭い」(5), 甲(42%)>乙(28%), $\chi^2=4.630 *$
 〃 「同 上」 甲(42%)>丙(23%), $\chi^2=4.498 *$
- (ロ) 計「権 威 的」(3), 甲(29%)>丙(17%), $\chi^2=6.003 *$
 女「同 上」 甲(30%)>丙(13%), $\chi^2=4.585 *$
 〃 「保 守 的」(2), 甲(6%)<丙(18%), $\chi^2=4.106 *$
 〃 「社会的関心乏しい」(5), 甲(13%)>乙(3%), $\chi^2=6.445 *$
 〃 「別 ない」(6), 甲(9%)<丙(26%), $\chi^2=6.663 **$
 〃 「同 上」 甲(9%)—乙(18%), $\chi^2=3.143 \times$
- (ハ) 計「利 己 的」(1), 甲(25%)—丙(16%), $\chi^2=3.159 \times$
 〃 「大衆より遊離」(2), 甲(18%)<丙(38%), $\chi^2=15.627 **$
 〃 「同 上」 甲(18%)<丁(38%), $\chi^2=11.889 **$
 〃 「不健康, 偽善的」(5), 甲(22%)—丙(13%), $\chi^2=3.038 \times$

51) (イ)1, 男一女 \times , 2+3, 男<女**

52) (イ)文科系, 2+3, 男(20%)<女(32%)*, 1, 男(23%)—女(18%), 理科系, 2+3, 男(17%)—女(28%) \times , 1, 男(23%)—女(11%) \times

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

- (=) 計「社会への意識が低い」(1), 甲(27%)—丁(15%), $\chi^2=3.468 \times$
 〃 「定見がない」(4), 甲(36%)<丁(51%), $\chi^2=4.465 *$

ここに大学間の有意差について各大学の特徴を要約してみると、甲は男子が「親の支配」を、女子が「親の社会的視野狭小」を、また、男女ともに、特に女子が「教授の権威的態度と社会的関心欠如」を不満とし、乙は女子が「親の支配」を不満とし、丙は女子が「教授の保守的傾向」を不満とする以外に問題視することが少く、「指導者の離反」を不満とし、丁は「指導者の離反」「民衆の無定見」を不満とするところに特徴がみられ、概して甲・乙では特に女子が家庭や大学の身近かな社会を問題視し、丙・丁では全般的に一般社会を問題視していると思われる。

3. 学年別比較 大学の教授に対して、学年が進むとともに「権威的態度」への不満が漸減する反面、「社会的関心乏しい」不満が漸増していること⁵³⁾以外には見るべきものはない。

4. 所見 不満な面だけに限られた問題設定の方法は必ずしも妥当とは思われないが、概ね学生の社会意識が旺盛に顕在化されてくる幾つかの刺戟語への反応を通して、新しい大学では社会意識が身近かな準拠集団をとびこえて一般社会に焦点づけられる傾向がみられることは注目される。

(3) 学生に対する社会人の態度についての希望 (1項選択)

1. 男女別・文理別比較 全般的結果は次の通りであるが、

- | | | | |
|-----------------------|-----|-------------------|-----|
| 1. 何も期待しない | 14% | 4. 学生を甘やかさず、鍛えること | 16% |
| 2. 学生の可能性を理解、援助すること | 53% | 5. その他 | 3% |
| 3. 学生の啓蒙的役割を信頼、尊重すること | 12% | 6. 無記入 | 2% |

大半のものが何らかの「期待」(2+3+4+5)をもち、半ばのものが学生への「理解」を求め、少数ながら学生への「信頼」と「鍛える」とが同じ位であり、性差・文理差はない。

2. 大学別比較 甲に比べて丁では「鍛える」が男子に多く、「何も期待しない」が女子に多いが、⁵⁴⁾これは社会への信頼と無関心との両極 第55表 E(3)学生に対する社会人の態度についての希望・学年別
 を男女の相違とする丁の特徴として注目される。

3. 学年別比較 学年とともに「信頼」への希望が漸減して、「鍛える」が漸増することが認められる(第55表)。

4. 所見 全般的には大半のものが社会人に期待しているが、それは学生の地位を社会人の上位においた「信頼・尊重」、逆に学生の地位を社会人の下位においた「鍛える」よりも、両者対等の地位意識に立つ「理解」が多く、そこに

選択肢(1項選択)	1年	2〃	3〃	4〃
1. 何も期待しない	14%	14%	15%	15%
2. 学生を理解する	53	50	55	53
3. 学生を信頼する	17	16	8	5
4. 学生を鍛える	12	13	16	23
5. その他	2	4	3	4
6. 無記入	2	2	3	0
例数 (100%)	317	238	262	222

3, 1年 > 4年, $\chi^2=17.271 **$
 4, 1年 < 4年, $\chi^2=11.442 **$

53) 3, 1年(31%) 2年(33%) 3年(27%) 4年(21%), 1年 > 4年 **, 5, 1年(7%) 2年(8%) 3年(11%) 4年(13%), 1年 < 4年 *

54) 4, 男子, 甲(13%) < 丁(35%) **, 1, 女子, 甲(9%) < 丁(21%) **

過去の特権的地位の低下が著しく意識されている。また、「信頼」が漸減して「鍛える」が漸増する学年別傾向は社会意識の成熟によって特権的地位の意識が低下してゆくことを示めているよう。

(4) 現代のわが国社会にどの程度希望をもっているか (5点尺度・1項選択)

第56表 E(4)わが国現代社会に対する希望の程度・男女別

	5.	4.	3.	2.	1.	例数 (100%)	M	SD
男	14	28	23	28	5%	759	3.19	1.15
女	6	25	32	30	6	265	2.97	1.02
計	12	27	25	28	5	1024	3.13	1.12

評定値, 5(大いに期待), 1(全く絶望)
 $5+4(\text{男}) > 5+4(\text{女}), \chi^2=9.670 **$

「何ともいえない」懐疑派が丁より甲に多く、また、甲・乙のみで女子の方に懐疑派が多い性差が認められる。⁵⁶⁾

3. 学年別比較 評定平均値において1年以後、2・3年に期待度が低下して4年で最も高くなっていることが注目される。⁵⁸⁾

4. 所見 一般的に現代社会に対する学生の期待度は必ずしも高いとはいえないが、2・3年は進歩的であるために期待度が低下し、4年では卒業期をひかえて役割意識も安定してきて期待度が上昇するものと解される。

(5) 大学の増加とともに学生の社会的地位が低下したといわれる状況の中で学生の役割はどうあるべきか (役割の内容についての自由記述を伴う1項選択)

1. 男女別・文理別比較 一般的結果は次の通りである。

- 1. 地位は低下していないし、役割も変るべきでない 9%
- 2. 地位は低下していないが、役割は変るべきである 8%
- 3. 地位は低下しているが、役割は変るべきでない 45%
- 4. 地位は低下しているし、役割は変るべきである 26%
- 5. 無記入 13%

但し、自由記述の内容は省略する。

「無記入」が他の設問では極めて少いのに対し上記の結果で多いことは問題設定が抽象的にすぎたためと考えられるが、総合してみると、「地位低下」を認めるもの(3+4)が71%、「役割変るべきでない」(1+3)が54%であり、地位・役割についての意識の大体の傾向は察知できる。ここに今日の学生に多い考え方として、往年の特権的地位の低下を認めても指導者の役割まで低下しているとは認めたくないものの様に思われるが、なお、そうした一般傾向に反して、地位低下を現実として新しい役割を求めようとするもの(4項)が26%に及ぶことは改めて注目される。

55) M, 甲(3.06)乙(3.22)丙(3.15)丁(3.21)

56) 3, 甲(27%)>丁(13%)*

57) 3, 甲, 男(25%)<女(37%)*, 乙, 男(21%)<女(35%)*

58) M, 1年(3.12)2年(3.08)3年(3.08)4年(3.25)

性差・文理差については見るべきものがない。

2. 大学別比較 %では「地位低下」を認めない考え方が乙、認める考え方が丁に多いが、さらに前述した今日の学生の一般傾向については大学差が少く、また、地位低下の現実のもとに新しい役割を求める考え方が丁に多い傾向が注目される(第57表)。

3. 学年別比較 前述の一般傾向は1年から3年にかけて漸減し、逆に4項が漸増しているが(第58表)、これは古い役割意識が3年にかけて新しいものに転換してゆくことを意味していよう。

4. 結 語

この調査研究は、総合研究「高等教育に対する社会的要請」の一端として第1年次調査について学生生活の主領域における地位・役割意識の動態を明らかにすべく行ったものである。

調査対象としては近畿地方の国公私立4大学本科学学生1630名を標本とし、質問紙郵送法により63.7%の有効回答がえられ、その一次集計資料について有意性が検定されたが、その結果と

その所見は既に記した通りである。以下、多少の重複をいとわず、設問の分類に従ってそれらの所見を要約して総合所見にかえたい。

(A) 大学について

1) 「勉学と教養」の目標意識は、新制大学発足以来10数年の今日、一般学生に、特に女子に一応、浸透しているが、現実には新しい大学の専門コース充実、旧い大学のマス・プロ的教育等の問題から社会の求める新しい役割意識の形成に十分な効果があげられているとは思われない。

2) それは、今日でも、なお、過去の特権的地位への郷愁が学生一般に深く残り、学歴尊重の社会風潮が強く反映されていることから考えられる。

(B) 学業について

1) 学生一般は単位主義に批判的であるとともに個人的思索の意義を支持する傾向にあり、恰も一般意見に代表される往年の学生の学業態度を受容しているかの如くみえるが、実際には学年とともに単位主義の進展、学業倫理の低下までもみられ、そこに往年の学業態度を可とする意識と実際の学業態度との間における大きいズレがある。

第57表 E(5)学生の地位、役割の変化について
・大学別

選択肢(1項選択)	甲	乙	丙	丁
1.地位低下していない、役割変るべきでない	9%	9%	3%	11%
2.地位低下していない、役割変るべきである	6	11	7	4
3.地位低下している、役割変るべきでない	42	50	48	38
4.地位低下している、役割変るべきである	27	21	23	38
5.無 記 入	15	9	20	9
例 数 (100%)	571	344	71	53

第58表 E(5)同上・学年別

同 上	1年	2年	3年	4年
1.地位低下していない、役割変るべきでない	10%	9%	6%	10%
2.地位低下していない、役割変るべきである	8	5	8	9
3.地位低下している、役割変るべきでない	51	44	40	42
4.地位低下している、役割変るべきである	19	27	33	25
5.無 記 入	12	15	13	14
例 数 (100%)	317	238	262	222

3, 1年 > 3年, $\chi^2=7.019$ **

4, 1年 < 3年, $\chi^2=16.199$ **

2) 学業への目的意識が強い傾向の大学では、「教官の人間性」にふれたい自己形成の理想と「資格・単位」の獲得だけをめざす現実とが共に強い傾向として相対立している。これは「勉学と教養」の教育目標が専門教育と一般教育のカリキュラムの中で十分に統合されていない現状の欠陥をも示唆している。

(C) 学生自治活動について

1) 一般に、大学共同体の一員としての役割意識や、所謂良識的とされる勉学本位の学生本分論が、自治会の政治活動への賛成者にも反対者にもはや全く重きをなしていないことは明らかである。

2) そこに賛否の立場いかんをとわず、旧い特権的地位に依存する指導者の役割意識からの離脱が共通して求められていると思われる。

3) しかしながら、多くのものは過去の地位への郷愁を残しつつ、これにかわる新しい地位・役割意識の形成、確立にまで至りえていないと思われる。

4) ただ、自治会の政治活動に賛成するものは2・3年で進歩的となり、政治的エリートに地位に立つ新しい先覚者の役割意識を形成しつつある傾向にある。

(D) 一般の生活態度について

1) 一般に学生が夢をもつ意義が認められ、また、現実には理想主義的生活態度が多く認められるものの、学年が進むとともにそれらが漸減しており、ここに、少数の政治活動家の学生を除けば、多くは自己の役割意識を裏うちする生活態度の動揺をさげられないものと思われる。

2) 潜在化する旺盛な社会意識は生活態度の裏うちを欠いて、多分に観念的傾向を帯びている。

3) 一般に学生は単に「学生であること」の地位にもとづいたエリート意識には批判的であるが、一方では「多くの青年」と異った「何らか責任ある役割」ともいうべきものを担わねばならないことだけは実感されている。

4) 今日、「苦学」でなくなりつつある学生アルバイトの意義の変化がエリート意識低下に及ぼす影響が注目されるが、将来、学生の経済生活水準低下が大きくなって「学びつつ働く」様相よりも「働きつつ学ぶ」様相を深くしてゆく場合、アルバイト理由の分野に経済的理由の比重が増大し、学生の地位・役割意識に微妙な影響を及ぼすであろうと思われる。この点に関して、昼間の学生と経済的水準の低いとされる夜間の学生との対比的研究も必要であろう。

(E) 社会との関連において

1) 社会への期待度は学生が進歩的になる2・3年で低下し、この時期に少数のものは政治的エリートとしての地位・役割意識に向い、その他の多くのものは動揺、模索をつづけ、いずれも4年で一応の安定をみて卒業してゆく経過をとっている。

2) この間、女子は理想主義的になるだけに動揺も激しく、反って社会への期待度も絶望の方に傾むくのではないと思われる。

以上、多様な変化をもつ学生生活意識上の一課題について、幾つの特徴、傾向を要約すると

片岡：「大学生の社会的地位に関する生活意識の調査」から

ともに幾つかの問題を仮設的に提起したが、これらの問題は改めて二次集計においてとりあげるべきものである。

〔附記〕 おわりに、氏名は略するが、標本抽出に協力された多くの各大学学生部教職員各位、及び、膨大な資料の検定作業の労をとって頂いた本学教育学部大学院修士課程、金子勲栄君に深く感謝の意を表しておきたい。